

# ヨーロッパの楽器博物館見聞記

## An Account of Visit to Museums of Musical Instruments in Europe

酒 井 諄

1976年4月から12月まで、約8ヶ月の在独期間中に、3ヶ月余にわたり西欧諸国（英国とフランスを除く）の各地を視察する機会を得たが、その間に主要な美術館と共に、なるべく多くの楽器博物館を見聞することも、当初からの目標の一つであった。とはいえ、結局合計十数ヶ所の見学に留まり、後掲のようにヨーロッパ全域に散在する多数のものから見れば、それはほんの一部にしかすぎなかった。それでも、この経験を通してヨーロッパの音楽文化や音楽生活の根底にある土壌の豊かさの一端を、このような一つの特殊な面からも伺いが知る思いであったし、とりわけ、この音楽の必需品、音楽文化史的にも重大な資料的分野の一部門をなす「楽器」というものに対する取扱かいにおいて、ヨーロッパ諸国と我が国の現状——全国的に殆ど皆無にも等しい楽器博物館の実状——とのあまりにも大きい落差に、感慨を禁じ得なかったのである。<sup>(注1)</sup>

総じて、ヨーロッパ諸都市の美術館・博物館の大規模なことやその数の多いことは、残念乍ら我が国の到底及ぶところではないように思われる。人口数万程度の、日本でいえば地方小都市に過ぎないような町にも、大いit美術館や博物館の類があり、それも日本の諸都市の事例からすれば不相応とも思われる程の壮大な形で存在するものが多い。<sup>(注2)</sup>

注1) 私の知る限りでは、個人コレクションは別として、「楽器博物館」の類としては、武蔵野音楽大学（東京）の楽器博物館が、かなりの規模のもの（我が国では恐らく最大）をもち、東京芸術大学の芸術資料館の楽器コレクションの他、国立音楽大学や上野学園大学、大阪音楽大学等が若干の施設をもって蒐集にも意を払っている程度である。（ヨーロッパ系楽器の場合）

ちなみに〈全国美術館ガイド〉によれば、国公私立併せて収録 939館のうち、コレクションとして楽器の項をあげているのは、次の10館（芸大・民博以外は何れも邦楽器であろう）のみである。水戸市：徳川博物館、東京都：東京芸術大学芸術資料館、東京都：宮城道雄記念館、名古屋市：徳川美術館、京都市：府立総合資料館、大阪府：国立民族学博物館、奈良市：正倉院、島根県：（美保関町）美保神社宝物館、山口県：（岩国市）西村博物館、香川県：金比羅宮博物館。

他にも「民俗資料」ないし「工芸」の部門に含めて若干所蔵している場合もあるかもしれないが、少なくともコレクションとして何がしかのまとまった存在を標榜しているのは上記だけである。この10ヶ所のうちには、点数は少くとも歴史的・資料的に極めて貴重な精選コレクションたる正倉院御物のようなものも含まれるとしても、これら全部を併せてもさほど大きな数量には達しないであろう。（全国美術館会議編：新版 全国美術館ガイド、美術出版社、1979年）

注2) ヨーロッパでは、一般的な博物館や美術館は大略次の如き名称（類型）のもとに開設されている場合が多いようである。古代（考古）博物館（蒐古館）、歴史博物（美術）館、美術館、絵画館、工芸

## ヨーロッパの楽器博物館見聞記

博物（美術）館，民族学博物館，民俗（郷土）博物館等。

さて，ヨーロッパの楽器博物館ないし楽器コレクションの設置形態を見ると，一応次のような3つの在り方に大別出来るようである。

1. 総合的な美術館・博物館等の一部門をなすもの。
  - a) 大規模な建築物の中に，その1セクションを占める場合。
  - b) 楽器コレクションだけが別の独立した建物に収納・展示されている場合。
2. 音楽大学等の教育・研究機関の附属施設としてあるもの。
3. 独立した機関としてあるもの。（音楽史博物館と一体化したものもある。）

一方，設置主体としては，国立，公立（王立・州立・市立・財団立など）と私設に区別されるが，然るべき規模のものとしては，今日では当然のことながら国・公立が主である。

他方，コレクションの内容ないし種類別で見ると，

1. ヨーロッパの古楽器（といっても実質上ルネサンス期～近代に集中）を主とするもの。
  - a) 各種の楽器を全般的・総括的に集めたもの。
  - b) 或種の楽器（例えば鍵盤楽器とか弦楽器の如き）を主体に集めたもの。
2. 自国の「民族（俗）楽器」ないし地方的・郷土的特色あるものに重点をおいたもの。
3. 世界の諸民族の民族楽器のコレクション。

（当然のことながら，この種のものは民族学博物館に多く見られる）

に分けられる。

ちなみに，グローヴの音楽辞典では，掲載されている楽器博物館ごとにS（弦楽器），K（鍵盤楽器），W（管楽器），P（打楽器），E（民族楽器），A（古代ないし先史的な楽器，関係資料），G（全般的なもの）の表示で，夫々蒐集のジャンルが示されている。

また，楽器博物館によっては，楽器の蒐集展示だけでなく，各種の資料——所蔵品に関するカタログ，解説書，レコードやテープ，写真コピーなど——を作成・頒布しているところもあるが，この面は，大型楽器博物館の場合でも，現状必ずしも充分整備されているとは限らないように思われた。

欧米諸国における楽器博物館の概要事情や主だったものの所在については，大部の音楽辞典 *Die Musik in Geschichte und Gegenwart*（以下 MGG と略す）や *Grove's Dictionary of Music and Musicians*（以下 Grove と略す）に，かなり詳しい項目が掲載されている。MGG では第6巻の〈Instrumentensammlungen〉の項（p. 1295～1310），Grove（第5版）では第4巻の〈Instruments, Collections of.〉の項（p. 509～515）。

その記事の中から，国別に掲げられているものを拾い出して，その数を両辞典対照的にまとめてみたのが次の表である。

ヨーロッパの楽器博物館見聞記

MGG, Grove に記載されている楽器博物館

— 国 別 件 数 —

国名		国・公立		私設	
		MGG	Grove	MGG	Grove
ヨーロッパ	ドイツ連邦共和国（西ドイツ）	24	22	4	3
	イギリス	24	53	16	40
	イタリア	14	16	—	—
	フランス	10	18	1	9
	スイス	9	5	1	3
	ドイツ民主共和国（東ドイツ）	8	6	—	1
	スウェーデン	8	7	2	2
	オーストリア	6	9	1	—
	ベルギー	5	5	2	2
	オランダ	4	6	2	2
	ソビエト連邦	4	4	—	—
	ポーランド	4	3	—	—
	チェコスロバキア	3	2	—	—
	ノルウェー	3	4	—	—
	フィンランド	3	1	—	—
	デンマーク	2	3	1	—
	スペイン	1	3	—	2
	ポルトガル	1	2	—	—
	アイルランド	1	1	—	—
ハンガリー	1	1	—	—	
北米	アメリカ合衆国	25	35	1	12
中・南米	メキシコ	—	1	—	—
	ウルグアイ	—	1	—	—
	ブラジル	—	1	—	—
	チリ	—	1	—	—
アフリカ	アラブ連合（エジプト）	2	1	—	1
	南アフリカ共和国	2	1	—	—
	ウガンダ	1	1	—	—
	アルジェリア	—	1	—	—
	ナイジェリア	—	1	—	—
その他	イスラエル	1	—	—	—
	インド	1	2	—	—
	（ボルネオ）	1	1	—	—
	トルコ	—	1	—	—
	ニュージーランド	—	—	1	1
	中華人民共和国	—	1	—	—
	日本	—	1	—	—

(備考)

◦ 地域別・国別に、MGG 記載の数の多いものから順に並べた。

◦ ドイツについては MGG, Grove とともに、東・西ドイツを一括して記載してあるので、所在地により筆者が区分した。MGG 記載の数のうち、民族学博物館関係の楽器コレクションは次の通りである

東・西ドイツ (計) 5  
 ス イ ス 1  
 スウェーデン 2  
 オーストリア 1  
 ベルギー 1  
 オランダ 2  
 ソビエト連邦 1  
 ポーランド 2  
 ノルウェー 1

## ヨーロッパの楽器博物館見聞記

掲載されたものの中には、個人の音楽家に関する記念館、例えばボンの〈ベートーヴェン・ハウス〉(Grove のみ)、アイゼナッハの〈バッハ・ハウス博物館〉やハレの〈ヘンデル・ハウス〉など、極く少数のものを例外的に含むにしても、各地に数多ある音楽家記念館の類は原則的に記載から除外されている。日本の1件(Grove)は、“Tokyo-Institute of Music (Japanese instruments)”となっているが、旧東京音楽学校のことであろうか。1950年代のこれらの辞典の記載から20数年後の今日、ごく少数の楽器博物館は成立しているとしても、音楽大国といわれる我国において、欧米諸国の楽器博物館に伍するほどのものが果してどれくらい登録可能といえるのであろうか。

さて上掲表のように、西欧圏だけでも100を超える楽器博物館のうち、筆者が見聞することの出来たものは次の13箇所であった。

### 西ドイツ) 西ベルリン市

◇国立音楽研究所 附属〈楽器博物館〉(プロイセン文化財団所属) Musikinstrumenten Museum Berlin, beim Staatliches Institut für Musikforschung, Stiftung Preussischer Kulturbesitz.

◇国立ベルリン民族学博物館音楽民族学部門の楽器コレクション Musikethnologischen Abteilung, Museum für Völkerkunde Berlin-Dahlem.

### ミュンヘン市

◇ドイツ博物館《ミュンヘン科学博物館》内の〈音楽室〉(楽器コレクション) Musiksaal, Deutsches Museum, München,

◇ミュンヘン市立博物館の〈楽器コレクション〉 Musikinstrumentensammlung, Münchner Stadtmuseum.

### オーストリア) ウィーン市

◇ウィーン美術史美術館〈古楽器コレクション〉 Die Sammlung alter Musikinstrumente des Kunsthistorischen Museum in Wien.

### スイス) バーゼル市

◇国立歴史博物館附属〈古楽器博物館〉 Die Sammlung Alter Musikinstrumente des Historischen Museums Basel.

◇国立民族学博物館 Museum für Völkerkunde Basel.

### ジュネーヴ市

◇美術・歴史博物館附属〈古楽器博物館〉 Musée d'instruments anciens de musique —Musée d'art et d'histoire.

### ベルギー) ブリュッセル市

◇王立音楽院附属〈楽器博物館〉 Musée instrumental du Conservatoire Royal de musique.

オランダ) ハーグ市 (デン・ハーグ市)

◇ハーグ市立博物館の〈楽器コレクション〉 Muziekinstrumenten, Haags Gemeente museum.

デンマーク) コペンハーゲン市

◇自動楽器博物館 Mekanisk Musik Museum.

スウェーデン) ストックホルム市

◇音楽史博物館 Musikhistoriska Museet i Stockholm.

ノルウェー) オスロー市

◇ノルウェー民俗博物館の〈楽器コレクション〉 Norsk Folkemuseum Oslo.

以下その主なものを、筆者の見聞した日程順に記してみよう。

1) バーゼルの楽器博物館

1976年7月初旬、ミュンヘンを発って、国際音楽教育会議 (ISME) に参加のためスイスのモントゥルー市へ向う途中、当博物館や美術館を見学すべくバーゼル市へ立寄った。6月半ばに所用のためバーゼルへ行った際、楽器博物館の隣にある音楽大学秘書室に立ち寄り、7月に見学したい旨申し入れておいたので、7月7日 (水) は休館日にも拘らず、態々館長のワルター・ネフ博士が待機して、筆者一人のために案内して下さったのには、これが最初の訪問先でもあったこととあわせ感激ひとしおであった。

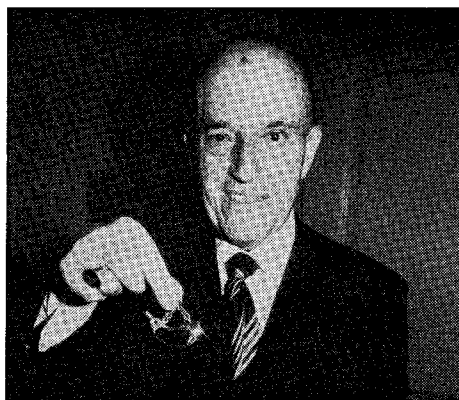
この楽器博物館は、市立バーゼル音楽院 (音楽大学) Musik-Akademie der Stadt Basel とスコラカントルム Schola Cantorum Basiliensis とが同居しているキャンパスの構内にあるが、国立歴史博物館に所属する別館として設置されている。1878年、「バーゼルの中世コレクション」の音楽室に集められた約40点から出発し、幾多の曲折 (度々の移転や個人コレクションの寄贈増大など) を経て1957年、現在地に収まったとのことである。(なお一部はバールフュッサー教会に展示されている。) 現在の所蔵品約800点という数は、それ程多い数とはいえないが、しかし、大変よく整備されいかにも管理がゆき届いている様子が見えがえる。

ヨーロッパの一般的な楽器が主で、民族楽器の類はあまり置かれていない。木造2階建、約10室程の小部屋に分れ、各室とも面積の関係か、かなり密集して置かれたりケース内にぎっしりと陳列されていて、手狭な感じであったが、ネフ館長も、もっと広い場所がほしい、と言っておられた。ここの古楽器は、単に展示だけでなく、隣接する音楽大学やスコラ・カントルムのメンバーや学生たちにも貸出され練習や実用に供されているとのことである。後に訪れたところでも、特に教育機関と関連した博物館は多くそのようであったが、考古資料と音楽実践との密接な連繫体制は大変うらやましい限りであった。

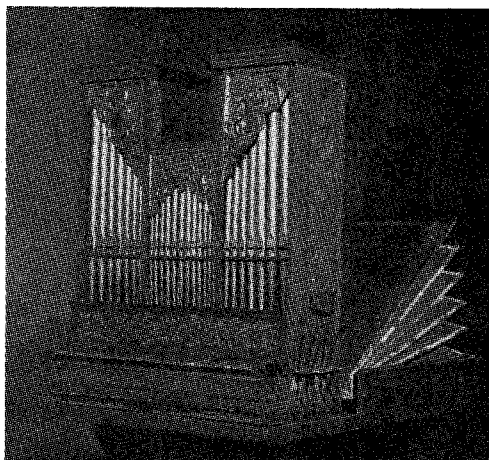
ネフ館長は、70才代と見うける老先生であったが、時にはケースから楽器をとり出して示したり、オルガンやクラヴィコードを弾いて説明するなど、暑いさかりに2時間余にわたり懇切

## ヨーロッパの楽器博物館見聞記

に案内して下さった。最近バーゼル出身の日本音楽研究者 P. アッカーマン氏 (Peter Ackermann) にきいたところでは、彼はもう80才を少しこえており、元バーゼル音楽大学の学長をつとめたこともあるとのこと、今も同大学で楽器学の講義を担当しておられる。ミュンヘンに帰ってから、同館で撮った写真をそえて礼状を出したところ、爾後の楽器博物館見学研究への励ましをこめた丁寧な書面を頂戴した。



〈ヤクトホルン〉のミニチュールを示す  
W.ネフ博士      ーバーゼル古楽器博物館ー



同館所蔵最古の小オルガン (16世紀) ー4ストップ  
(〈バーゼルの古楽器〉より引用)

この館では、ネフ博士のテキストによる 小型ながら美しい 〈バーゼルの古楽器〉という本と、同館所属のルネサンスオルガン (16世紀) による17センチLPレコード (同氏夫人エスター・ネフ演奏) が出版されている。

### 2) ジュネーヴの古楽器博物館

8月下旬、スペイン旅行からミュンヘンへの帰途ジュネーヴの美術・歴史博物館の本館と、そこから 200m と離れていない別館の古楽器博物館をたずねた。丁度日曜日の朝で、筋向いの美しいギリシャ正教の寺院ではミサをやっていたが、楽器博物館の方は休館日であることが出来なかった。葛の生い茂る瀟洒な建物で、所蔵は 300 点に満たない小型ながら、逸品が集められている由で、開館日・時間に気をつけて (火曜15-18時, 木曜10-12時, 14-18時, 金曜20-22時), 機会があったら是非一見の価値がありそうである。楽器の写真コピー等は本館の方でも入手出来た。

### 3) ウィーンの楽器博物館

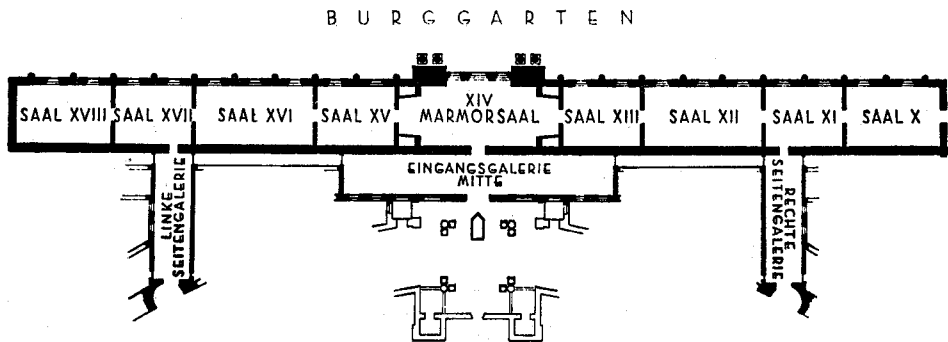
9月始め、5日間のウィーン滞在中、夜ごとにシーズンへき頭のオペラ、昼は連日美術史美術館を訪れ、ウィーンの限りなく豊かな芸術生活に浸り切って楽しくも多忙な毎日であった。その中日、美術史美術館の別館として新王宮 Neue Burg に開設されている〈古楽器コレクション

ョン〉を見学した。国立オペラ劇場から程近いところ、著名なモーツァルト像のある王宮公園を背に、広大な英雄広場を前にして王宮から突き出るように増築されたこの新王宮だけでも正面 200mにも及ぶ程の巨大な建物である。その中央やや右寄りの堂々たる大理石の階段を昇りつめたところが、古楽器コレクションのギャラリーの中央である。

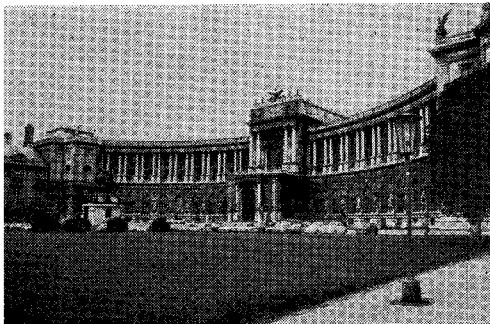
名にしおう歴代ハプスブルク王家の居城、王宮の部屋数が2600ときいただけでもその規模の壮大さがしのばれる。

ウィーン楽器博物館の展示室配置

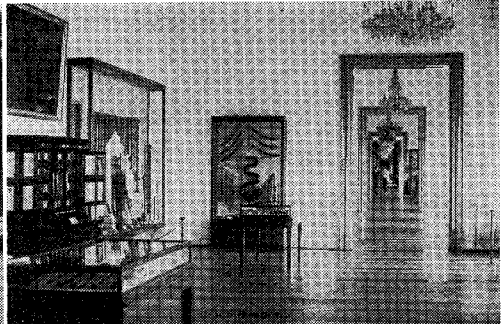
(ウィーン美術史美術館発行「古楽器コレクションカタログ(1)」より引用)



Saal X	Holzblasinstrumente	Saal XVI	Klassische Hammerklaviere
Saal XI	Blechblasinstrumente	Saal XVII	Romantische Hammerklaviere
Saal XII	Zupfinstrumente	Saal XVIII	Moderne Hammerklaviere
Saal XIII	Streichinstrumente	Eingangsgalerie Mitte	Klaviere, Lauten
Saal XIV	Marmorsaal: Prunkstücke, Erinnerungsinstrumente	Rechte Seitengalerie	Klaviere, Fellinstrumente, Streichquartett, Blasinstrumente der Mozart-Zeit
Saal XV	Clavichorde, Kielklaviere	Linke Seitengalerie	Klaviere, Metall-, Holz- und Glasspiele, Orgelspielschrank



ウィーン新王宮の正面



新王宮内の楽器展示室の見通し

この楽器コレクションについて、ウィーン出身の音楽学者で現在国際博物館協議会楽器部会会長（在ニューヨーク）のエマーヌエル・ヴィンターニッツは、自著「西欧世界の楽器」の中で次のように言っている。

「現代の楽器コレクションの数はあまりにも多く、ここにひとつひとつ来歴をしるすことは出来ない。だがそれが建立された経緯は興味ぶかいものがあるので、ここにヴィーン、ブリュッセル、ニューヨークという3つの世界的大コレクションを実例にとりあげてみよう。

ヴィーン美術史博物館の楽器コレクションは、大コレクションのうちでもっとも古く、そうしてもっとも新しいものである。その中核となったのは、2つの古コレクションで、ひとつは16世紀チロル大公フェルディナンドが蒐集してチロルのアンブラス城に保管していたもの、もうひとつは17世紀にはじめられたロンバルディアのオビッツィ家のコレクションである。この2つの古いコレクションは、第一次大戦後、合併されることになった。イタリア・ルネサンス美術の研究家であり、また熱心な室内楽奏者であり、楽器とその歴史にも通暁していたユリウス・フォン・シュロッサーが、アンブラスとオビッツィの2大コレクションを合体させ、芸術史博物館で公開することを実現したのである。(以下略)」(E. Winternitz: Musical Instruments of the western world—皆川達夫・磯山雅訳：楽器の歴史、1977年12月、KKパルコ出版局 p. 40～41)

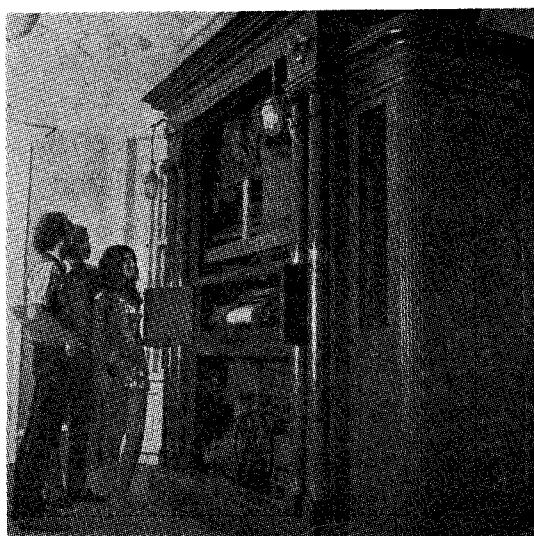
現状のものは、第2次大戦後の1947年以降再編成され、約1000点を数えて今日に至っている。上述の如く王侯の貴重なコレクションがその基盤になっているだけに、世界的にも貴重な逸品が揃っており、それらは今日刊行されている楽器図鑑類の多くの頁をかざっている。上掲図のように殆ど一列に並んだ12室——その1室ずつが、百数十名規模の合併教室位あるから全体の広大さがほぼお分りいただけよう——に、ゆったりとスペースをとって、数多くの楽器が周囲から表裏とも見えるように展観されている。近代のピアノ室には、大音楽家達の使用した楽器も多く収められているが、何とんでもルネサンス・バロック期の美しい各種楽器が見ものである。資料類について受付でたずねたところ、鍵盤楽器の一分冊だけ頒けてもらえたが、どういうわけか、総合カタログも、プリント写真やスライド、テープ、レコードの類もその場に全くおいてなかったのが残念であった。

#### 4) コペンハーゲンの自動楽器博物館

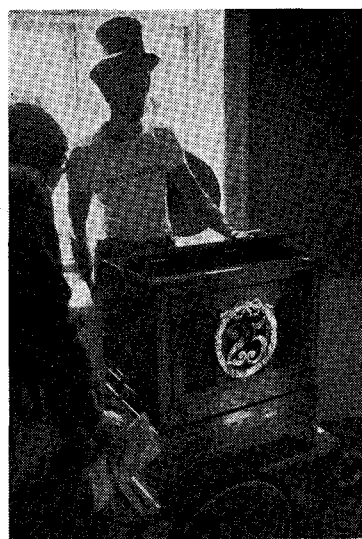
筆者の巡った楽器博物館の中では唯一の私設コレクションであったが、国際的にも著名な自動楽器専門のコレクションとして、多くの参観者を集めているようだ。私が入った時も丁度土曜日の午前中で、子供連れの子もかなりいた。19世紀後半から今世紀始め頃に盛に製作された各種の自動楽器が林立し、隣室から突如として自動オーケストラの華麗な音が響いてきたり、こちらでは、Tシャツにシルクハットといういでたちの若者が手廻しオルガンを弾いていたり、とても楽しい雰囲気につつまれていた。自動楽器といえば、往年の自動ピアノや手まわしオルガン、オルゴールの類しか経験のなかった筆者にとって、数々の大型楽器を目の前にしたのは驚きであった。オーケストリオン Orchestrion と名付けられたいくつかは、ピアノ、パイプオルガン、ドラム、タンバリン、シンバル、トライアングルから2～4丁のヴァイオリン



の自動演奏装置まで組みこんでにぎやかな音を出した。巾2～3 m、高さ3～4 mの大型のものもある。オルゴールも、大型の円筒型のもの、ディスクタイプのものなど、バンジョーやハープの自動演奏装置、ポジティブオルガン仕様のものに自動装置のついたもの、各種のミュージック・ボックスなど、まことに多種多様な展示品に目をみはるばかりであった。ここに



＜オーケストリオン＞  
—コペンハーゲン自動楽器博物館—



＜手廻しオルガン＞を弾く館員  
—同 館—

は、各種のカタログや自動楽器の辞典類や参考文献、所蔵品によるレコードなど、多くの資料が用意、販売され、自動楽器の注文や修理にも応じているようである。今日のようなオーディオ機器の発達やレコード、テープ、ビデオ等のゆきわたった社会にとって、この種自動楽器——かつてはレコードなどに代るものであり、それ以上にレストランやホテル、映画館やお祭り広場などの必需品でもあった——は、もはや過去の遺物でしかないようにも思えるが、一方ここには、往年の、素朴でなつかしくほほえましい響きや手作りのメカニズムがあふれていて、そのような独得の魅力が現代人の郷愁をそそるように思われてならない。実際、他のいくつかの楽器博物館でも、自動楽器のコーナーには、いつも楽しげな人だかりがしていたのを思い出す。

##### 5) スtockホルムの音楽史博物館

9月半ば、ここを訪れたのは日中もうす暗い雨の日で、北欧特有の陰うつさに打ちひしがれた感じであった。国立美術館を出て、オペラ劇場の前を通り、大建築の王宮わきの一角、奥まったところに位置した同館に、傘のしずくを払いながら入った時、参観者は一人も居なかった。若い館員がはじめのうち親切に案内してくれたり、角笛を鳴らしてくれたりしたが、残念ながら言葉がよく通じなかった。この館は大部屋方式で、パネルで数セクションに区切ってあ

## ヨーロッパの楽器博物館見聞記

り、ルネサンス期から近代まで時代順に配列されている。一画に若干の民族楽器（特にスカンジナビアの民俗楽器）もまとめられていた。数ヶ所の壁面には、その時代の奏楽風景のイラストがそえてある。

ここで興味をひかれたのは、各セッションごとに、その時代の音楽のサンプルと若干の説明がきけるように、カセットデッキのボックスとヘッドフォンが備えられていることであった。きき終ると（又は途中でヘッドフォンを元へかへすと）テープは自動的に巻き戻される。

ホールの一隅、数十人位収容できるスペースに若干の椅子が並べられていたが、ここで時折小コンサートが催される由であった。月例コンサートの予告プログラムも用意されていた。プリント写真やレコード類（特に民族音楽関係）も販売されている。1901年の開館（MGG）というから、かなり古い歴史をもつ、北欧での代表的大型楽器博物館と言うことが出来るのであろう。（民族楽器も含めて約5000点をもつ）

### 6) オスロー ノルウェー民俗博物館の楽器室

市役所の背後の船着場から渡船で約10分、ビグドイ半島にある民俗博物館は、古めかしい質朴な建物だが、内部の展示スペースはかなりのものだ。2室ほどの楽器室があり、同館の目的にそって北欧の民族楽器が主である。展示楽器はかなり整備不足のように見うけられたが、案内書には、所蔵の楽器を使って、館内でリサイタルも催される、とある。一般の観光客や参観者の関心は、しかし北欧の家具調度品や、ラップ族関係のおびただしい展示、大小さまざまな民族家屋の散在する広大な野外展示場に向けられているようであった。楽器関係の頒布資料は何も見当らなかった。

### 7) デンハーグ（ハーグ）市立博物館の楽器コレクション

10月2日、アムステルダムから列車でブリュッセルへ出る途中、デンハーグに下車して数時間を過した。フェルメールの〈デルフト風景〉やレンブラントの逸品をもつマウリッツ・ホイイス美術館と、モンドリアンの作品の多くを占める市立博物館を見るのが目当てであった。階上にあるモンドリアンの一連の作品を見、階下をざっと見渡して、さて出ようとした時、入口の資料コーナーで、楽器関係の数冊のカタログや本を発見し、あわてて楽器セクションの存在に気づき引返す。先程通過した所とは別の、中庭をはさんで対照の側、広い部屋をかき型の壁で支切っであるが約10室分相当の大スペースをとって、おびただしい数の楽器群に出会ったのにはたまげた。

ハーグの銀行家 D. F. Scheurleer のコレクションをベースに、1935年、新博物館完成時で約1050点、1951～2年にアムステルダムの国立美術館から移管の150点や、デルフトの音楽家 J. C. Boers のコレクションなども加わり、現在ヨーロッパ、非ヨーロッパの楽器併せて2500点をこえる所蔵というから、大きな規模である。閉館迄にあまり時間がなかったので——ヨー

ロッパの美術館などでは、閉館時間というのは、参観者を全部しめ出して入口を閉ざすのがピタリその時間という習慣のようなので、10～15分前には何となくソワソワしてしまう——、ざっと見渡すのみに終ったが、ここで一つ気になったことがあった。

「日本」のセクションは「支那」と同室であったが、雅楽器のセットと箏、三味線、尺八が、そして「能楽」と表示された壁面には、〈Kotsuzumi〉と〈Taiko〉と能面三個が掛けられていた。箏には〈SO NO KOTO〉と表示され、ほら貝には〈Rappakai〉と記されている。よけいなお世話のようにも思いはしたが、丁度近くに居た係員に、〈SO NO KOTO〉は〈SO or KOTO〉とすべきであり、〈Rappakai〉は〈HORAGAI〉だと告げたが、あまり意を払っていない風であった。あとで考えてみると、見張員にとってそんなことは知ったことではないのである。つい先日もコペンハーゲンの歴史博物館の「日本」コーナーで、江戸期の屏風絵に、狩野派を〈KARINO HA〉と表示してあったことと意思合わせ、このような誤記が方々で日本人の目のとどかないところでまかり通っているのだろうかと思うといささかやるせない気分になった。もっとも、C. ザックスの楽器辞典 *Reallexikon der Musikinstrumente* には〈Rappakai〉の項目があり「日本の貝製のホルン (Muschelhorn) ……」と説明されているが、日本の楽器名としてはどうしても法螺 (ほら) 貝であって、喇叭 (ラッパ) 貝ではなじめないのではないか。  
(注)

注) 田辺尚雄氏によれば、ラッパは、「日本では一般に金管楽器の総称のように用いられている。……」(平凡風社：世界大百科辞典) われわれの通念もまさにその通りであり、C. ザックス自身も、「ラッパ」がその類型にかかわる語であることを認めているのだが。(柿木吾郎訳：楽器の歴史(上) p. 203)

日本音楽の用語の国際化——そのスタンダードの確立の必要性がようやく注目され叫ばれ始めている昨今であるが、上記のようなことも再検討を要する一例ではないかと思われる。

#### 8) ブリュッセルの楽器博物館

デン・ハーグからブリュッセルへ着いた翌朝、何はさておいても、と楽器博物館を訪れた。「世界一美しい広場」といわれたグランプラス——ゴシックの市庁舎や「王の家」、バロックのギルドハウスに囲まれた大広場——或いは中央駅から歩いて10分とかからないところにある。丁度日曜日で10時半の開館に少し間があったので、前の美しい小公園で待つことにした。地図に〈エグモンド広場〉とあり奥中央に銅像があるので、ひょっとして、と思って近寄って見ると、たしかにそれはゲーテの悲劇、ベートーヴェンの音楽で名高いエグモント伯と協力者ホールン伯の像であった。  
(注)

(注) ネーデルランド独立の志士エグモントは、ホールンと共に1568年このブリュッセルで処刑されて果てたのであった。

開館と共に入場し、受付で学長の紹介状を示して第1室に入っていたら、呼ばれて主任らしい老紳士に紹介された。階下には既に数人の参観者も居たが、Theó Guillaume と称するこの人は、わざわざ私を導びいて、階段昇り口の鎖を解いて2階へ案内してくれた。というのはきのうの雨もりのため、2階は閉鎖中とのことであった。最初の室がインド室、その充実した展示は詩人タゴールの兄弟の寄贈による（ベルギー国王レオポルドⅡ世への）と説明してくれた。次室が日本と中国。日本のものは、さほど多くはなかったが、特に雅楽器のグループは、鉦鼓が欠け、太鼓も枠だけで本体なく——修理中とのこと——、かつ鼓もなかった。また箏も楽箏でなく俗箏が置いてあったように思う。つづいてイラン、イラク、タイ、ベトナム、カンボジア、インドネシア——ガムラン楽器はよく整えられている——メラネシア、ポリネシア、オーストラリア、アフリカ各地、中米……と、極めて豊富な非ヨーロッパ民族楽器が展示されている。階段のわきには中国の編磬が置いてあったのが私には珍しかった。巾2メートル以上もある大きな架台に8片ずつ（現物は1片ずつ欠けていたが）2段にへの字型の石板の磬が吊してある。

階下はヨーロッパ系の楽器（古代・中世も含む）。老主任は、時にクラヴィコードや16世紀半頃の古いヴァージナルを試し弾きしてくれたり、シャルマイを吹いたり、レガールのリードを取外して示してくれたり、風邪ぎみで、咳きこんだりしながらも終始懇切に案内してくれた。本館は上記のように、王立音楽院の関連施設でもあり、収蔵品は研究者や音楽院の学生の使用にも供されているのである。「ここの館員は何人か」と尋ねると、専従は自分とまで4人、予算の関係もあり大変少くてとても手が廻らない、と肩をすくめておられた。

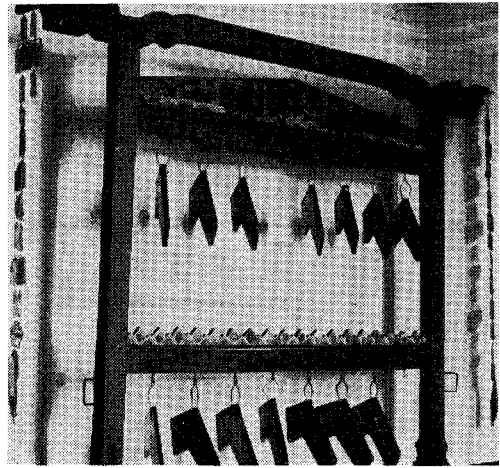
この博物館の概要は、紹介記事によれば（同館発行の案内書およびブリュッセル・タイムス 1977年3月4日付）およそ次の通りである。

‘ブリュッセル 楽器博物館は、その所蔵の豊富さ（4000点以上）と多様さにおいて世界最大級の楽器コレクションであり、1977年に設立100年を迎えた。その所蔵品の基礎となったのは、近代音楽学の創始者の1人、F. J. Fétis による19世紀中期の個人コレクションである。フェティスの没年（1871）、そのコレクションを引継いだベルギー政府は、その価値と重要性を認識し、維持発展を計ってきた。とりわけ1877年から1924年にかけて館長の席にあったマイヨン Victor Charles Mahillon——ホルンボステルと並び近代の楽器分類法の基礎づけに大きな役割を果たし、それは C. ザックスに継承、確立された——により大きな成長を遂げた。戦後は、R. ブラガードや現館長 R. メイアーらの努力により一層整備されて今日に及んでいる。サクソフォンの発明者、アドルフ・ザックスの貴重な楽器なども含まれている。展示室の狭さ——といっても28室もある——のため現在展示されているのは約800点である。……’

ヴィンターニッツも世界の3大コレクションの1つにあげているこの楽器博物館である。先述の如き日本室の状況に鑑みても、もう少しそれが充実してほしいものであり、そのためには、日本文化の海外紹介の意図をもって雅楽器はじめ、日本の代表的な楽器を、何がしかの予



ブリュッセル楽器博物館正面の一角



＜編 磬＞（中国） 一同 館一

算（ささやかなもの）を充てて日本から寄贈する位の配慮があってもよいのではないか、と痛感したことであった。

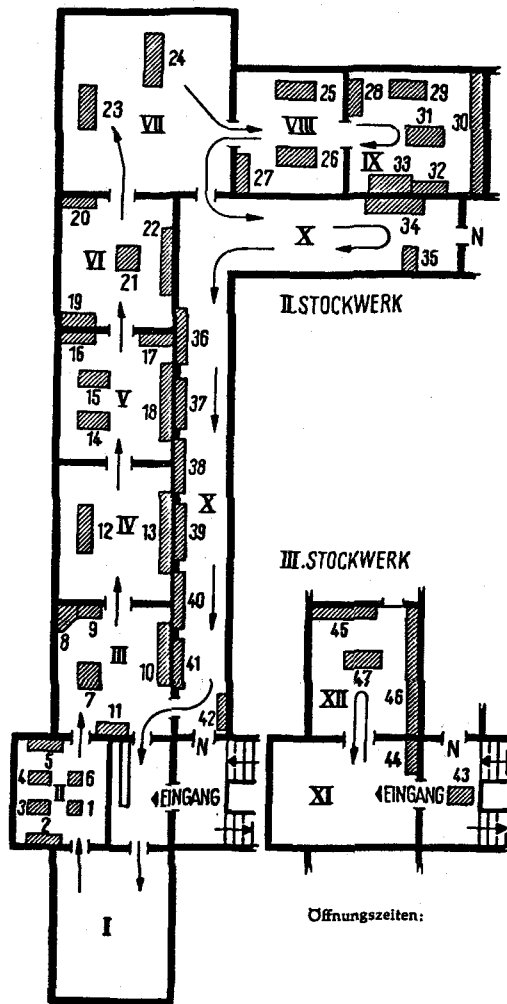
#### 9) ベルリンの楽器博物館

1976年9月から10月にかけて、国際交流基金による宮内庁の楽部のヨーロッパ巡演が行なわれた。その演奏に先立って岸辺成雄先生が各市で講演をもたれていたもので、丁度ベルリンでの先生の日程に合わせ筆者も西ベルリンへ出向いた。10月13日、岸辺先生と共にダーレムにある巨大な国立博物館の一部門〈民族学博物館〉を訪ね、クルト・ザックスゆかりの音楽民族学セクションを見学（紙面の都合で省略）のあと、楽器博物館をたずねた。ここは、国立音楽研究所および音楽大学に附属した機関でもある。もう閉館時間が迫っていたが、若いドクターが私達2人を懇切に案内してくれた。

1888年以来数々の個人コレクションを取得、増強をはかり、第二次世界大戦で一たん危機に陥ったが、戦後絶大なる努力を以て、復興をとげて現在に至っている。楽器の展示は全11室（約1700点）に及び（上図参照）、著名な音楽家達の使用した由緒ある楽器も沢山集められている。ヨーロッパの楽器が主であるが、第12室には日本その他の民族楽器も展示され、その中に、本学にも多くのコレクションを寄贈して下さった故水野佐平氏の寄贈による箏や三味線の逸品も含まれていてなつかしかった。

退出間ぎわに若いドクターが、グラスハーモニカを演奏してくれた。18C後半に生れいつしか衰退したこの楽器にかねがね興味をもっていた筆者は、丁度持ち合わせていたカセットテープレコーダーでこれを録音するチャンスにめぐまれた。これまでに訪れた楽器博物館でも時折見かけはしたが、大ていどこかがこわれて不完全だったように思う。ドクターは、どこからか

ベルリン楽器博物館の展示室配置 (同館 <展示案内> より引用)



# Inhaltsverzeichnis

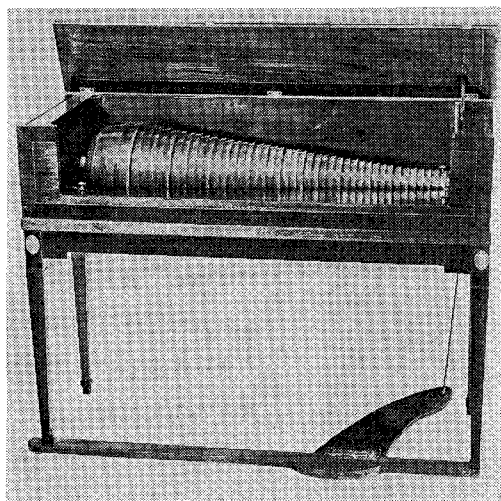
- Raum I Vortrags- und Musiksaal
- Raum II Material und Technik des Instrumentenbaues
- Raum III Deutsches und italienisches Instrumentarium des 16./17. Jahrhunderts
- Raum IV Deutsches und niederländisches Instrumentarium des 17./18. Jahrhunderts
- Raum V Vom 17. zum 18. Jahrhundert
- Raum VI Instrumentarium des 18. Jahrhunderts
- Raum VII Instrumente bis zum ausgehenden 18. Jahrhundert
- Raum VIII Instrumente der ersten Hälfte des 19. Jahrhunderts
- Raum IX Instrumente bis zum ausgehenden 19. Jahrhundert
- Raum X Haus- und Volksmusikinstrumente
- Raum XI Vom 19. zum 20. Jahrhundert
- Raum XII Außereuropäisches Instrumentarium

Öffnungszeiten:

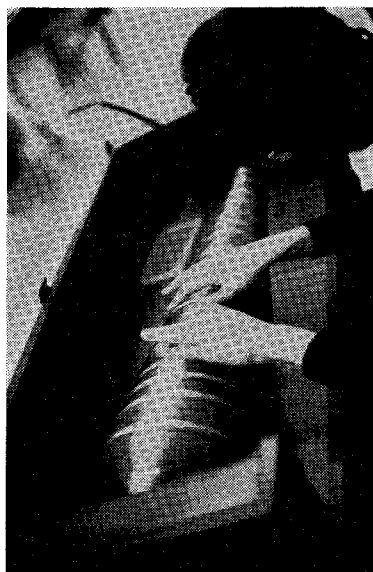


ベルリン楽器博物館員に話しかける 岸辺成雄教授

皿に水を汲んで持参したが、演奏が始まっ  
ようやくわけが分った。指先を濡らして、  
指をお椀型のグラスに圧着するさい摩擦を  
よくするためであった。目前に始めて耳に  
する、夢のようにすきとおった和音の絶妙  
なひびきに、思わずため息が出た。時間の  
都合でくまなく落着いて参観する余裕がな  
かったのは残念であったが、又の機会を期  
して、充分に用意されたカタログ、スライ  
ドコピー、テープ資料などの若干をもとめ



〈ガラスハーモニカ〉とその演奏  
—ベルリン楽器博物館—



て退出した。

ちなみに、この楽器博物館の館長は、楽器研究やアラビア音楽の研究でも知られる Alfred Berner (1966年就任) であり、MGG の〈楽器コレクション〉項目の執筆者でもある(館長就任前)。そして、この楽器博物館が国内的にも世界的にも重要な指導的役割を果たしていることをひしひしと感じさせた。

#### 10) ミュンヘン ドイツ博物館の楽器コレクション

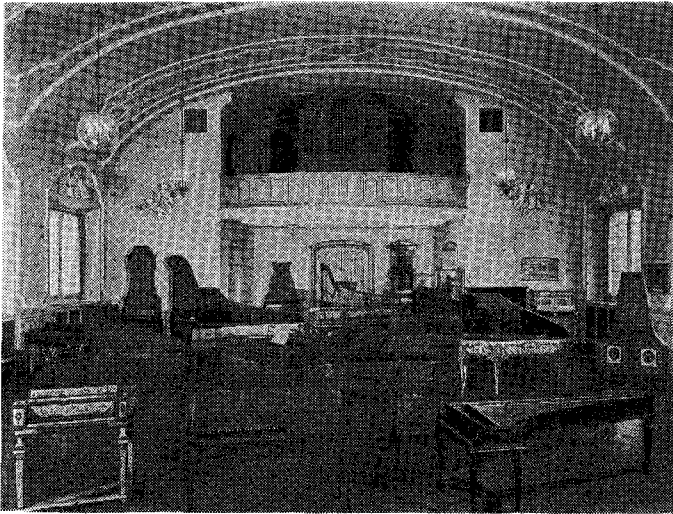
(注)

1903年に創設されたこの博物館は〈ドイツ博物館〉という名のもとに、世界的に有名であるが——世界最大といわれるだけでなく‘世界の科学技術博物館のモデル的存在’と見なされている——その実体からすれば真正正銘の「科学博物館」なのである。その運営を支える根本理念は、単なる‘生命なき’機械技術の展示ではなく、‘科学・技術と文化との相互浸透’の有様を誰にでもわかり易く示す、ということのようだ。

(注) その規模は、床面積40,000㎡、総回遊距離16KM、展示件数45,000(同館発行の案内パンフレットによる)。また年間の見学者150万人(講談社版:ミュンヘン科学博物館)。以上のデータだけでも大よそその規模の大きさが推測されよう。

そう理解すると、科学博物館に楽器コレクションが含まれるという、常識的には一見とまどいがちな事情も納得がいく。つまり音響理論・技術と音楽という芸術文化との緊密な関連性において生み出された成果として楽器をとりあげているのである。(同館の案内書もそのような趣旨を表明している)

この楽器コレクションのことは、渡独後知人から聞き知った。ミュンヘン市内のドイツ人



ドイツ博物館楽器展示室（ムジークザール）  
—同館発行のレコードジャケットより引用—

家庭に下宿していた筆者は、いつでも行けると思いながら日を過ごす間にいつしか帰国の日も近づいた11月半ばの或日、ようやく見学の時をもったのである。

Musiksaal（楽器展示セクション）は電子科学部門のコーナーを通り抜けて奥まったところに位置しているので、目ざして行かないことにはいささかとりつきにくい。入口正面に等身大の「トランペット吹き人形」



＜トランペット吹き人形＞（同館）

（1810年、ドレスデンのカウフマンが製作した自動装置）が立っている。このユニークな人形は余程有名なのか、ミュンヘンを紹介する各種の案内書やポスター類にしばしば登場する。

「ペロニウム」と称する、トランペットとティンパニーを組合せた自動楽器（やはりカウフマンによる1805年の作）や踊り人形付きの音楽時計、手まわしオルガンなど各種の自動楽器室をぬけると大広間（ムジークザール）に出る。両壁にオルガンを備え、各種の鍵盤楽器が展示されている。珍らしく思ったものに「ジラフェンクラフィーア」（キリン型ピアノ）——1830年頃——や、水平に取付けたハープを3オクターヴ半程の鍵盤で弾くように組まれた「オルフィカ」——1810年頃——、ピラミッド型の「ピラミーデンクラフィーア」——1760年頃

——、折たたみ携帯用の小型ピアノ「ライゼクラフィーア」——1805年——などもある。

見学者もわずか数人程の静けさであったが、しばらくするうち60才位の老係員がいとも流麗にハープシコードを弾きはじめた。とっさに「しまった」と思った。今日はカメラだけしか持っていない。ややあって私はその係員に身分を告げ、明日この時刻にテープレコーダをもって来るから録音させてほしい、と頼んだところすぐ承知してくれた。翌日 テレコ、マイクを用意して行くと、驚いたことに10台程のハープシコードやピアノに譜面がのっている。つまり私



のためにその楽器の製作年代に合わせて夫々同期の曲目を弾くべく準備してくれていたのである。私は大いに感激し、約45分のテープに彼の演奏と楽器解説をたっぷり収録することが出来た。

高令者雇庸対策にそって働いているのであろうか、一見ただの看視員らしい人でもこうして見学者に達者に弾いてきかせることの出来るのが、いかにも音楽大国ドイツらしいと感ぜずにはおられなかった。キリン型ピアノでは、6本のペダルを使ってドラムやトライアングルの音もとりました面白い音をきかせてくれた。ベヒシュタイン製の自動ピアノもきかせてくれたが、彼の説明では、同社は約8000本のロールを作り、ここにはその4分の1、2000本程が保有されているという。ロール2000本といえは大変な容量である。この一事だけでも当博物館の大規模さを象徴しているように思われた。4年程前に仕入れた日本製の小型チェンバロを示して、なかなかよく鳴るとも言っていた。

この大広間のさらに奥3室程に多くの弦楽器や管楽器、かなりの民族楽器も展示されている。帰途売店であさった資料の中に、〈ドイツ博物館の管楽器〉という100余頁のカタログがあった。当1976年発刊で、楽器カタログとしては第1分冊ということだから、此の種の作業はまだまだこれから、ということなのであろう。その序文に、‘本館の所有楽器約1,200、内約半数を展示’とあるから、このコレクションもまたヨーロッパの楽器博物館としては有数の部に入るであろう。

帰国数日前、馳けこむようにしてミュンヘン市立博物館の楽器コレクションを訪れたが、民族楽器（考古的資料も含む）を主体とするこの龐大なコレクション——約3000点といわれる——は、展示を垣間見ただけでもその豊富さに圧倒される程であった。事務室できくと、まだカタログ等の整理はこれからで、2年先頃には出来るだろうと笑っていた。名とアドレスを告げて、出来たら送ってくれるように依頼して退出したが、3年後の今もって入手していない。

以上の他にも、その機を得られなかったけれども、ぜひ訪れたいと望んでいたものに、ニュールンベルクの国立ゲルマン美術館の楽器コレクション、ライプツヒ大学の音楽学研究所並びに楽器博物館、パリ音楽院附属楽器博物館、ロンドンのヴィクトリア・アンド・アルバート美術館やホーニマン博物館や王立音楽院の楽器コレクションなど、代表的かつ大規模なものを見たかったし、一方、ミッテンヴァルトのヴァイオリン博物館やクレモナの市立博物館（ヴァイオリン関係）とかインスブルックのチロル郷土博物館（民俗楽器）のような特殊なコレクションなどにも心ひかれるものがあった。

このようにあげてゆけばまことにきりのないことでもあり、上記のような見学先にしても、ざっと一通りのかけ足見聞にすぎなかったから、次の機会には、少数の博物館に的をしぼって丁寧に見たり、又事柄や対象を限定して調査するようなことも考える必要があると思っている。

しかし、大づかみではあったにしても今次の経験は、ヨーロッパにおける楽器博物館というものの概念の形成には大いに役立ったし、はじめにもふれたように、ヨーロッパ音楽文化の認識に対する一つの新しい視点を追加することも出来たと考えている。

ちなみに、楽器博物館のほか、ヨーロッパの楽器ツアーの楽しみのもう1つの対象はオルガンである。ヨーロッパ全土に殆ど無際限に存在するオルガンは、云うまでもなく教会がその主たる設置場所だが、由緒あるカテドラル（ドゥオーモ）だけでなく、小都市や山間僻地の教会にも意外なほど立派なオルガンのある場合も多いようである。——かえって戦禍をまぬがれて古い伝統を保持し得ていることもあろう。筆者も、都市めぐりには欠かさず教会を訪ずれオルガンを見学するようにつとめたが、音楽の歴史の永い時期にわたってオルガンが「楽器の女王」と呼ばれ君臨した事情も、さこそとうなずかれる。しかしこの分野は、数多くの出版物も示すように、おのずから別の、独自の領域として扱われねばなるまい。

ヨーロッパの楽器博物館の重要なものは、旧王侯貴族や裕福な好事家達、音楽関係者などの貴重なコレクションをベースに開設されたものが多いようであり、更に国家や都市、地域社会の大きなバックアップがあって今日の盛況を来しているのもであろうが、実はその背景に、民間にも為政者にも文化財を蒐集し維持継承する根強い文化的精神的志向性が働いていることを見のがしてはならない。それを我が国の状況と比較するとき、単に「歴史や伝統の重みの違い」というようなあいまいな観念で片づけたり、投入しうる予算高のせいにするのは早計であろう。ともかくも、我が国におけるこの領域の充足推進と国際交流を希う気持切なるものがある。

#### 参 考 文 献

- Die Musik in Geschichte und Gegenwart, Bd. 6, Bärenreiter-Verlag Kassel-Basel-London, 1957.  
Grove's Dictionary of Music and Musicians (5th. Ed.) Vol. IV. Macmillan & Co. LTD, London, 1966.  
Riemann Musik Lexikon (Ergänzungsband) Personenteil A-K, B. Schott's Söhne Mainz, 1972.  
Sachs, Curt: Real-Lexikon der Musikinstrumente, Georg Olms Verlag, Hildesheim, New York, 1972 (1°=1913)  
Winternitz, Emanuel: Die schönsten Musikinstrumente der Abendlandes, Keyserische Verlagsbuchhandlung, München, 1966.  
——, 皆川達夫, 磯山雅訳: 楽器の歴史, パルコ出版局, 1977.  
C. ザックス著, 柿木吾郎訳: 楽器の歴史 (上・下巻), 全音楽譜出版社, 1966.  
黒沢隆朝: 図解 世界楽器大事典, 雄山閣, 1972.  
全国美術館会議編: 新版全国美術館ガイド, 美術出版社, 1979.  
富永惣一編著: ヨーロッパの美術館案内, 鹿島出版会, 1975.  
高橋雄造編: 世界の博物館11 ミュンヘン科学博物館, 講談社, 1978.  
Musical Instruments of the world—An Illustrated Encyclopedia by the Diagram Group, Paddington Press Ltd., 1976.  
Bragard, R. & Den Hen, F. J.: de muziekinstrumenten in kunst en geschiedenis, Albert de Vischer-Uitgever, 1967.

- Friedemann, Otterbach: Schöne Musikinstrumente, Schuler Verlagsgesellschaft München, 1975.
- Buchner, Alexander: Musikinstrumente von den Anfängen bis zur Gegenwart, —Ins Deutsche übertragen von Otto Guth, 1972, Artia, Prag, Verlag Werner Dausien, Hanau/Main .
- Weigel, Johann Christoph: Musicalisches Theatrum, —Faksimile-Nachdruck herausgegeben von A. Berner, (Documenta musicologica XXII), (2°) 1964, Bärenreiter Kassel.
- Wormit, Hans-Georg (ed.): Kunstwerke und Dokumente aus den Sammlungen der Stiftung Preussischer Kulturbesitz in Berlin, 1974.
- Otto, Irmgard (編): Musik-Instrumenten Museum Berlin—Ausstellungsverzeichnis, 1965.
- Katalog der Sammlung Alter Musikinstrumente 1. Teil Saitenklaviere, Kunsthistorisches Museum (Neue Burg), Wien, 1966.
- Haags Gemeentemuseum: Catalogus van de musiekinstrumenten Deel 1, Frits Knuf, Amsterdam, 1969.
- Nef, Walter (Texte), Heman, Peter (Bilder): Alte Musikinstrumente in Basel, Stiftung für das Historische Museum Basel, 1974.
- Deutsches Museum—Wegweiser durch die Sammlungen, Peter-Winkler-Verlag, München, 1972.
- Seifers, Heinrich: Die Blasinstrumente im Deutschen Museum—Beschreibender Katalog, R. Oldenburg Verlag, München, 1976.
- その他、関係各博物館発行の案内書、レコード・テープ・等の説明記事。
- なお、本稿校正の時点で次の書を手に入れた。
- Jenkins, Jean (ed.): International Directory of Musical Instrument Collections, U. F. Knuf, Amsterdam, 1977.

この本は、ユネスコ国際博物館協議会 (ICOM) の楽器部門の数年来の協力によって編集されたもので、世界の楽器コレクションに関する最新かつ広範な情報を提供するものではなかろうか。世界全域にわたる各国 (94ヶ国) ——ただしアメリカ合衆国とカナダについては1974年のアメリカ音楽図書館協議会編のリスト掲載分以外の少数のみ集録——のコレクションが記載されている。原則として蒐集数20件以上のものについて、その名称・所属と所在地、開館時間、設置年、蒐集品の種類と数、発刊資料など、また主要なものについてはその由緒等にわたって概要が附されている。もし編者が意図するように、近い将来この初版本をもとに追加訂正による第2版が出れば、より適切で貴重な楽器博物館専門のガイドブックとなるであろう。

## 後記

今回の海外研修は、財団法人 偕成会 (遠山音楽財団) の在外研究に対する奨学金 (音楽学研究者のための) の交付を受けて実現したものである。

筆者にとって初めての海外研修の機会を与えて下さったことに深く感謝している。

また筆者の渡欧に先立って、楽器博物館の見学に関するいろいろなお教示を賜った大阪音楽大学音楽文化研究所主幹西岡信雄氏 (同大学事務局長)、本稿執筆に際して貴重なアドバイスをいただいたプロムジカインスティテュートの R. ヴリーゲン館長ならびに川端清氏、国立音楽大学附属図書館主任司書 松下鈞氏 (音楽図書館協議会事務局長) の諸氏に、この機会をかりて謝意を表する次第である。